

黒島流れと三島村

今からおよそ110年前の明治28年7月24日のことでした。近くを通った台風は、黒島の近くでかつおをとっていたなんせきもの漁船をそうなんさせ、たくさんの人々の命をうばいました。411人が亡くなったといえますから、大変な事故だったのです。

そのころのかつお漁船は、長さ17メートル、はば4メートルほどのはん船で、台風の進み方を知るためのきかいもなく、近づいていることに気づいたときにはひなんするひまがなくそうなんをかくごしなければならなかったといえます。

この事故でそうなんした人のほとんどは、片泊の塩手鼻・ユキノ瀬あたりに打ちよせられました。黒島の人びとはケガをした人、息たえだえの人をそれぞれ背負って高いがけをよじ登り、ようやく家につれて帰り、枕崎から助けの船が来るまで、食事の世話をしたり、ケガの手当てをしたりしました。村の人たちは、わずかにたくわえていたようじょうまい養生米（重病人が出たり、災害にあったりなどの非常時のためにたくわえている米）を家々から持ってきて食事にあてたのです。また、亡くなった人たちを丁重にとむらいました。

このときから、黒島の人々と枕崎の人々との交流が深くなり、黒島の人々が枕崎へいくと、ていねいにもてなしてくださり、つながりを深めたといえます。

この悲しい出来事を「黒島流れ」といいます。